

## アラビア半島南東部における石器時代遺跡の遺りやすさに関する地考古学的考察 A geoarchaeological study of the persistence of Stone Age sites in the southeast Arabian Peninsula

近藤 康久<sup>1\*</sup>, 野口 淳<sup>2</sup>, 三木健裕<sup>3</sup>, 小口 高<sup>4</sup>

Yasuhisa Kondo<sup>1\*</sup>, Atsushi Noguchi<sup>2</sup>, MIKI, Takehiro<sup>3</sup>, Takashi Oguchi<sup>4</sup>

<sup>1</sup> 東京工業大学大学院情報理工学研究所, <sup>2</sup> 明治大学校地内遺跡調査団, <sup>3</sup> 東京大学大学院人文社会系研究科, <sup>4</sup> 東京大学空間情報科学研究センター

<sup>1</sup>Dept. Comp. Sci., Tokyo Institute of Technology, <sup>2</sup>Archaeological Research Unit, Meiji Univ., <sup>3</sup>Dept. Archaeology, Univ. Tokyo, <sup>4</sup>CSIS, Univ. Tokyo

アラビア半島南東部では近年、アラブ首長国連邦のジェベル・ファヤ遺跡 [1] やオマーン南部のドファール地方 [2] で、解剖学的現代人が東アフリカからこの地域を通して南アジア・中央アジア方面へ拡散していった可能性を示唆する石器群の発見が相次ぎ、現代人の「出アフリカ・南回りルート」として研究者の注目を集めている。これをうけ、2012年12月から2013年1月にかけてオマーン内陸部のアル=ワフラ地区およびワディ・アル=カビール地区において遺跡分布調査をおこなったところ、複数の石器時代遺跡を同定することができた。発見した石器群は、中部旧石器時代から上部旧石器時代、新石器時代以降（先ハフィート期）に属するものまで多岐にわたる。これらの石器は、製作材料となる良質なチャートの岩脈のある丘陵の裾部もしくは山麓の扇状地縁辺で採集される頻度が高かった。また、丘陵頂部に造営された積石塚に石器集中が伴う事例も複数確認された。これらの石器撒布地点における地表面の観察および試掘の結果、(1) 山麓や古い段丘上では風成作用が卓越しており、デフレーションにより細粒物質だけが移動し石器が地表に露出していること、(2) 山麓扇状地では崩積または沖積作用により原位置を離れた石器が散布していること、(3) 低位面では沖積作用により更新世の地形が失われ、完新世の遺跡だけが遺存していることが明らかになった。この観察結果に基づき、生態文化ニッチモデル [3] を用いて遺跡の存在確率を空間的に評価した。

[1] Armitage SJ et al. (2011) Science 331:453-456.

[2] Rose JI et al. (2011) PLoS ONE 6:e28239.

[3] Banks WE et al. (2006) PaleoAnthropology 2006:68-83.

キーワード: 地考古学, アラビア半島, オマーン, 石器時代, 遺跡形成過程, デフレーション

Keywords: geoarchaeology, Arabian Peninsula, Oman, Stone Age, site formation process, deflation